

優秀賞

小さな奇跡がくれた大きな自信

高知県 土佐女子高等学校一年 筒井 南実

「冬うらら俳句少女と呼ばれけり」

これは私が小六の時、俳句をはじめて二年ほど経った時に詠んだ句だ。

小学一年生の冬、五台山山頂の俳句ポストにたまたま俳句を投句した。その頃は俳句が「五・七・五」の十七音だということしか知らなかったが、なぜかとても興味があつた。まさかこの一句がきっかけで、これからの自分にとって、こんなにも俳句が大切になるなんて思ってもみなかった。

その数ヶ月後、もう俳句ポストの一句なんて忘れていた頃、私宛に一通の封筒が届いた。「高知県俳句連盟」封筒にはそう書いてあった。不思議に思いながら開封すると、私の句が大人の句と並んで特選を受賞したことが記されていた。私は驚いてもう一度隅々まで読んだ。

「北風が葉っぱのシンバル鳴らしてる」
やっぱりあの日、私が出した句だった。

父と母も驚き喜んだ。私はこのことが嬉しくて俳句を勉強してみたいという気持ちになり、色々な俳句結社や

句会に問い合わせをしてもらった。その時私はまだ七歳だった。

「お子様はちょっと」と門前払いとなり、俳句を学ぶすべはその時にはなかった。

月日は流れ、私は小四になっていた。小三の時に漏斗胸の手術をして二年間胸に金属のバーを入れていた。体育などはやれないことが多くて自信をなくしていた。

ある日のこと、家族で見学に訪れた県の文化財の縁側に座って、私はぼんやりしていた。

「どうしたの？」

そう話しかけてきて下さったのは、細身で優しそうに笑う公子さんという女性だった。初対面にも関わらず、年上の人と話すのも自分の事を話すのも何か嬉しくて、自慢話のように長々と話をした。公子さんはウンウンと優しく聞いてくれた。俳句で特選をとった事まで話した。

「うちの句会に来てみない？」

突然、公子さんが所属する花野句会に誘って下さった。「是非。」

と言われ、私は

「はい。」

と即答し、参加することを決めた。

そこからは、展開があまりにも早くて疑問などを感じ
る暇もなく毎回楽しかった。生まれて初めての句会は、
大人達に囲まれ、すごく緊張したが、そんな初心者の私
と母を句会の人達はとても温かく迎えて下さり、

「小学生でこんな句を作るなんてすごいね。」
と言って下さったことに励まされた。

元々、言葉が好き、色々な本を読むことが大好きだっ
た私はあっという間に俳句にのめり込んでいく。子ども
高知新聞の『レッツ！五・七・五』にも小四から中三最
後まで、ずっと休まず投句を続けた。

やがて、中学校に入学し、私は演劇部に入部した。ち
よっとネガティブなところのある自分を変えたいと思
った。部活に入ると忙しくなり、俳句を詠む機会も減っ
てしまうのではと思っていた。中学生活も初めての部活
も新鮮だった。女子だけという環境や、初めて知る演劇
の言いまわし、俳句にするタネはたくさんあった。初め
て経験する先輩後輩関係、苦手な数学の授業。初めての
経験で心が踊った。

「方程式に八つ当たりする残暑かな」

俳句と演劇は似ている。演劇は一つ一つの台詞の中に、
役の気持ちと自分自身を詰め込んで発信する。俳句だっ



てそうだ。十七音という短い音の中に自分の想いを季語に託して表現する。どちらにも短い言葉の中に登場人物や作者の気持ち詰まってあふれてくる。

「台本に親指の跡春惜しむ」

花野句会に入ってから、俳句についてたくさん学ぶことができた。それに、他の方の俳句を選評し、鑑賞し、発表することもできるようになった。すごく貴重で大切な経験をさせて頂いてると思う。俳句を始めた小四の冬と比べて、できることが増えていくことが嬉しい。師匠の森先生が子供の私でも優しく温かく迎えて下さったことに今でも本当に感謝している。俳句を通して学んだり、頂くものはとても多かった。

俳句からは出会いもたくさん頂いた。私が所属している俳誌の会合で見知らぬ女性が近づいてきて私に言った。「私は俳句を始めて三十年になるのよ。時々俳句が全然作れなくなることもある。そんな時あなたの句を読むと新鮮で元気をもらえる。そして、また俳句を作ろうと思えるのよ。」

と手を握り話して下さった。この事は私の心に今も残っている。ものすごく大きな自信を与えてくれた忘れられない出来事だ。

このようなたくさんの出会いに支えられ、感謝し大切にしながらこれからも俳句を作り続けたい。俳句に出会えて本当に良かった。